非現実感質問紙の作成

道都大学¹ 須永範明

Construction, reliability and validity of Feelings of Unreality Inventory

Noriaki Sunaga (*Faculty of Social Welfare, Dohoto University, Ochiishi, Mombetsu 094*)

The present research assumed that a feeling of unreality is the defining characteristic of depersonalization phenomena. In Survey 1, two scales were constructed: the State Feelings of Unreality Scale for measuring a feeling of unreality as a transitory state and the Trait Feelings of Unreality Scale for assessing individual differences in disposition to experience that state. Both scales had high internal consistency. The Trait Feelings of Unreality Scale had sufficient test-retest reliability. In Survey 2, the Trait Feelings of Unreality Scale was found to be moderately correlated to level of maladjustment. Survey 3 showed that those higher in State Feelings of Unreality experienced greater negative affect. The results of Surveys 2 and 3 supported the construct validity of the Trait Feelings of Unreality Scale and the State Feelings of Unreality Scale, respectively.

Key words: depersonalization, feelings of unreality, adjustment, mood states.

離人感に関する従来の研究は事例研究と理論的考察が中心であり、実証的研究は少ない (Trueman, 1984)。その理由の一つとして、心理計量学的に妥当な測定道具が開発されていないことが指摘されている (Trueman, 1984)。

離人感の測定道具の開発を難しくしている原因の一つとして、離人感に固有の外的行動や生理的反応が見出されていないことが挙げられる (Levy & Wachtel, 1978)。そのため、離人感の生起やその程度について知るために行動観察や生理学的測定を用いることができず、被験者自身の主観的報告に頼らなければならない。主観的報告に基づく方法として面接法と質問紙法とがあるが、面接法では客観的な数量化が難しく、実施も簡便ではない。従って、現在のところ、尺度構成を行った質問紙が離人感の測定道具として最も適していると思われる。

測定道具を作成する際には、まず対象となる現象を明確化する必要がある。しかし、離人感について研究者間で一致した定義はない。Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 3rd Edition (以後 DSM-III; American Psychiatric Association, 1980) は離人感を、自己に関する知覚・経験の変化と自己の現実感の喪失と定義している。この定義は比較的広く受

け入れられているが、この定義の範囲を大きく超える、非常に多様な現象が離人感あるいはそれに付随するものとして報告されてきた。その中には、個人の感覚・感情、思考、記憶、身体感覚のいずれかが自分自身のものではないという経験 (Trueman, 1984)、周囲の状況に関する現実感の低下 (Levy & Wachtel, 1978)、よく知っている事物や人物に関する親近感の喪失 (Roberts, 1960)、感情の鈍麻 (福井, 1990)、自分自身を観察している感覚 (Munich, 1978)、感覚の麻痺 (Munich, 1978)、時間知覚の異常 (Roberts, 1960) などがある。このような多様性は離人感という現象の理解と包括的な定義を難しくしてきた (Munich, 1978)。

離人感が多様な現象であっても何らかの共通する特徴があるならば、その特徴によって定義づけることができるかもしれない。離人感に共通する特徴として、非現実感すなわち現実感の低下が挙げられる。離人感とは、その対象が自分自身の存在や自分の行動、周囲の事物や人物、あるいは周囲の世界全体とさまざまなものである。しかし、何らかの対象が現実のものと実感されないという経験を含む点では共通していると思われる。非現実感とは離人感の主要な特徴として以前から指摘されていた (Levy & Wachtel, 1978)。そこで本研究では、非現実感を離人感の本質的特徴と仮定し、離人感を何らかの対象に関する非現実感の経験と定義する。

¹ 現所属：日本大学文理学部。

ところで、非現実感の概念化においては、主観的状態としての非現実感とその状態への陥りやすさという特性とを区別する必要がある。前者は状況や時間に伴って変化する一時的現象であり、状態非現実感と呼ぶことにする。後者はその現象の生起しやすさに関する比較的安定した個人差であり、特性非現実感と呼ぶことにする²。両者を別々に測定する尺度の作成が研究上有益と思われる。

本研究では、離人感の本質的特徴を非現実感と仮定し、非現実感測定のための質問紙の作成ならびにその信頼性と構成概念妥当性を検討した。非現実感質問紙には、特性非現実感尺度（以後、特性尺度）と状態非現実感尺度（以後、状態尺度）の2尺度を含めた。

調査 1

目的

特性尺度と状態尺度を作成することを目的とする。本研究では、離人感を非現実感という単一の概念で定義しているため、両尺度はともに1次元の尺度として構成することにした。

方法

被験者 道都大学社会福祉学部生男子279名と女子72名、合計351名に調査を実施した。回答に不備のあった者を除き、特性非現実感項目で309名（男子242名、女子67名、平均年齢18.4歳）、状態非現実感項目で286名（男子224名、女子62名、平均年齢18.3歳）を分析に用いた。

調査質問紙 特性非現実感：離人感の多様性を考慮し、広範囲な内容の項目を調査質問紙に含めることにした。まず、Jacobs & Bovasso (1992) の離人感尺度から適当と思われる項目を選んだ。また、Myers & Grant (1972) および田辺 (1992) により収集された離人感経験の記述ならびにDSM-III (American Psychiatric Association, 1980) および加藤・保崎・笠原・宮本・小此木 (1985) による離人感の記述から選び、質問項目に適する表現に変えた。更に独自に作成した項目を加え、全部で118項目用意した。各項目ごとに“ふだん一般、どの程度の状態か”を評定させた。評定には“いつもそうである”、“ほとんどそうである”、“しばしばそうである”、“ときどきそうである”、“まれにそうである”、“めったにない”、“まったくない”の7段階尺度を用いた。

状態非現実感：特性非現実感項目を状態非現実感項目にも使用した。但し、一部の項目については、現在

経験している非現実感についてたずねるように表現を変えるか、適切な表現に変えられなかったものは除いた。状態非現実感項目は107項目となった。

各項目について“現在、今どの程度感じているか”を評定させた。評定には“非常にそうだ”、“とてもそうだ”、“ややそうだ”、“どちらでもない”、“ややそうではない”、“ほとんどそうではない”、“まったくそうではない”の7段階尺度を用いた。

手続き 特性非現実感項目と状態非現実感項目を合わせて冊子にしたものを集団で被験者に実施した。被験者はまず特性非現実感項目に回答し、続いて状態非現実感項目に回答した。所要時間は約40分であった。

結果と考察

特性非現実感項目と状態非現実感項目の両方で、7段階の選択肢の極に位置する“まったくない”と“まったくそうではない”（反転項目では“いつもそうである”と“非常にそうだ”）に被験者の回答が集まる傾向が見られた。単一の選択肢に極端に反応が集中する項目は尺度項目として不適切と思われるので、70%以上の被験者が両極のどちらかの選択肢を選んだ項目を分析から除くことにした。特性非現実感項目から15項目、状態非現実感項目から20項目が除かれた。また、項目の表現が理解しづらいため被験者が質問内容を誤解したと判断された項目が、特性非現実感項目で6項目、状態非現実感項目で9項目あった。これらを分析から除いた。従って、分析に用いた項目は、特性非現実感項目で97項目、状態非現実感項目で78項目となった。

特性非現実感項目と状態非現実感項目のそれぞれについて因子分析を行い主成分分解を求めた。特性尺度と状態尺度を1次元の尺度として構成するため、それぞれの第1因子のみを採用した。なお、第1因子の寄与率は特性非現実感項目で31.6%、状態非現実感項目で34.9%であった。第1因子に.40以上の負荷量をもつ項目が、特性非現実感項目で77項目、状態非現実感項目で56項目得られた。これらの中から、①同じ項目を両尺度に含めない、②意味内容がよく似た項目はいずれか一つのみ採用する、という基準のもとに、それぞれの尺度に含める項目を選択した。その結果、特性尺度として47項目、状態尺度として29項目が選択された。なお、特性尺度は、反転項目が少ないことを考慮して、因子負荷量がわずかに.40に達しなかった1項目を加え、48項目とした。特性尺度の項目と状態尺度の項目をTable 1とTable 2にそれぞれ示す。

各尺度の項目数は、因子分析において.40以上の因子負荷量を示した項目数に比べかなり少ない。そこで、各尺度が因子分析で得られた第1因子を適切に代表しているか否かを検討した。まず、非現実感が強いほど高得点となるよう、0から6点を各項目に与え、

² これは、不安の概念化における状態不安と特性不安 (Spielberger, Gorsuch, Lushene, Vagg, & Jacobs, 1983) の区別と同じものである。

Table 1
特性非現実感尺度項目

項 目	因子負荷量
まわりの世界は止まっていて、その中を自分だけが動いているような感じがする	.742
何か物を見ても、本当にそこに存在していると感じられないことがある	.736
自分自身が現実には存在していないような奇妙な感じがする	.736
他の人と話をしているとき、相手の人が現実そこにいないという感じがしない	.727
風景や建物が幻みたいに見える	.726
風景や建物を何か透明な膜を通して見ているように思える	.723
周囲と自分とが切り離されているような感じがする	.722
自分のまわりの世界が存在していないかのように感じることもある	.719
まわりの物を見ても立体感がない	.697
離れたところから自分を感じているような経験がある	.694
自分のまわりにある物と自分とを区別することができなと感じることがある	.694
この世界にいる人間は自分だけの感じがする	.691
身近の出来事が遠くの出来事のように思える	.676
他の人と話をしているとき、自分が話をしているという実感がない	.675
自分のまわりのことがまるで違う世界のことのよう思える	.673
自分の時間だけがまわりの世界から隔絶されたように感じる	.670
現実にはどこかしら違和感を感じる	.669
自分の動きを自分でうまくコントロールできない感じがする	.658
他の人と話をしているとき、自分の外から自分を見ているような気分になる	.650
周囲と自分との間にガラスのような透明な壁があるような感じがする	.647
周囲の物が本当にそこにあるのか疑問に思うことがある	.646
自分の声がおかしなものに聞こえ、自分の声ではないような気がする	.644
目覚めているときもまるで夢の中にいるような感じがする	.639
自分の行動や考えていることを他人のこのように眺めている感じがする	.636
自分の動作に対して、自分がしているとは感じない	.630
まわりを見回すと、まるで古い写真が映画を見ているような気分になる	.628
周囲の物が奇妙に見える	.614
感覚が鈍くなったように感じることもある	.613
もとの自分ではなくなってしまったように感じることもある	.598
鏡で自分の顔や姿を映してみると、それが自分だという感じがあまりしない	.593
自分の意志とは関係なく、体が機械のように自動的に動いている感じがする	.580
ことが自分の意志とは関係なく口から出ることがある	.577
目の前にあるものでさえもまるで遠く離れたところから眺めているように感じることもある	.576
人の話を聞いて、何だか決められた台詞をしゃべっているような感じがする	.571
何かを食べていてもその味をあまり感じない	.567
音楽や人の声を聞いてもその音を感じないことがある	.554
自分が他の人と話をしているときなど、自分の出ている映画を見ているような感じがする	.550
自分が自分のすぐ後ろにいるように感じることもある	.534
自分が今まで親しんできた人や物が何となく疎遠に感じられることがある	.515
人々が生きているように感じられないことがある	.512
人々が機械じかけの人形のように感じられる	.500
手足などの自分の体の一部がとても縮んでいる、あるいは大きくなっているように感じることもある	.487
何かをしているとき、手をとめて、行っているのは自分だと確かめることがある	.476
例えば、そこに机があることはわかるが実際にあるという感じがしない	.465
けがをしても痛みを感じないことがある	.422
感覚ははっきりしている	-.410
音楽や人の声ははっきりと聞こえる	-.410
自分は周囲と同じ世界にいと感じている	-.380

Table 2
 状態非現実感尺度項目

項 目	因子負荷量
まるで自分が周囲と違う世界にいて遠くから見ているような感じがする	.819
自分が現実にはここにいないような感じがする	.798
他の人には現実にはそこにいるという感じがしない	.785
自分の身体を含めたすべてのものから自分が切り離されているように感じる	.761
自分のまわりの世界が奇妙に感じられる	.756
周囲にある物と自分との間にヴェールでもあるようでピンとこない	.741
周囲の風景と自分とが違う次元にあるかのように感じる	.740
自分のまわりに霧がかかっているような感じで、周囲をはっきりと感ずることができない	.738
まわりの人たちはまるで動いている人形のような感じがする	.715
自分の体なのに自分で動かしていない感じがする	.699
まわりの人たちが死んでしまっているかのように感じられる	.697
感覚がどこかはっきりしていない	.695
現実がどこかしら夢のように感じられる	.685
離れたところから自分を見ているような感じがする	.681
自分がまるで夢の中にいるような感じがする	.680
自分の周囲の動きは非常にゆっくりで、スローモーションのように感じられる	.660
自分の出ている映画を見ているような感じがする	.647
周囲の状況には現実らしきがない	.624
まわりの物を見てもそれがどこにあるのだろうかという感じがする	.618
人の声や音は遠くから響いてくるように聞こえる	.614
物の大きさや形が実際とは奇妙に違って見える	.595
手をとめて、今質問に答えているのは自分だと確かめたい気がする	.512
体をつねって、自分が存在していることを確かめたくなる	.502
まわりの物には立体感を感じない	.495
自分の動きを自分でうまくコントロールできる	-.443
自分のまわりの状況をはっきりと感ずることができる	-.423
まわりの音や人の声をはっきりと聞こえる	-.422
いつもと同じ自分だと感じている	-.410
自分の意志で体を動かしていると感ずる	-.402

その合計得点を尺度得点とした。次にこれらの尺度得点と因子分析で算出された因子得点との相関係数を求めた。特性尺度で、 $r=.990$, $df=307$, $p<.001$, 状態尺度で、 $r=.985$, $df=284$, $p<.001$, という極めて高い相関係数が得られた。この結果から、両尺度は因子分析で得られた第1因子をよく反映していると言える。

可能な得点範囲は特性尺度で0—288, 状態尺度で0—174である。平均得点は特性尺度で40.9 ($SD=34.2$), 状態尺度で25.4 ($SD=24.7$)であった。Table 3に男女別の各尺度の平均と標準偏差を示す。両尺度において女子の得点は男子に比べ有意に高かった(特性尺度： $t=2.048$, $df=321$, $p<.05$; 状態尺度： $t=2.328$, $df=309$, $p<.05$)³。また、特性尺度得点と状態尺度得点との間には、 $r=.894$, $df=276$, $p<.001$, という高い相関が見られた⁴。

³ 両尺度は正規分布から逸脱していたため、Wilcoxon 順位と検定も行った。その結果、両尺度とも女子の得点が男子より有意に高いことが示された(特性尺度： $z=2.355$, $p<.05$; 状態尺度： $z=2.885$, $p<.01$)。

⁴ このような高い尺度間相関が見られたことについては、特性非現実感が状態非現実感の主たる規定因の一つであるということのほかに、尺度の実施順序が影響を及ぼした可能性が考えられる。本調査では特性尺度、状態尺度の順序で実施したが、これは Spielberger et al. (1983) が状態-特性不安質問紙で推奨している実施順序とは逆であった。Spielberger et al. (1983) は、特性尺度を先に実施すると被験者の感情状態が影響を受け、それが状態尺度得点に反映される恐れがあると指摘している。もし特性尺度に回答することで特性上の個人差に応じた感情状態が被験者に喚起されるならば、両尺度得点間には高い相関が認められるであろう。本調査においても、特性非現実感上の個人差に応じた状態非現実感が喚起されていた可能性は否定できない。

Table 3
特性・状態非現実感尺度の男女別平均と標準偏差

	男	女
特性非現実感尺度得点	38.9 (33.78)	48.4 (35.19)
状態非現実感尺度得点	23.6 (24.31)	31.4 (25.43)

注) ()内は標準偏差

両尺度の信頼性を検討するため Cronbach の α 係数を求めたところ、特性尺度で .951、状態尺度で .884 であった。いずれも高い内的整合性を有していると言える。また、特性尺度の再テスト信頼性を検討するため、調査1に参加した被験者の中の105名（男子75名、女子30名）に調査1の4週間後に同尺度を実施した。その結果、再テスト信頼性は $r = .785$, $df = 103$, $p < .001$ であり、これは満足すべき水準と言える。なお、状態非現実感とは、状況に応じて強度の変化する、個体の一時的状態であるため、状態尺度については再テスト信頼性を検討しなかった。

以上の結果から、今回作成した二つの非現実感尺度は因子の妥当性と十分に高い信頼性を有していることが示された。しかし、得点の分布の形状については、両尺度とも正規分布はなしておらず、得点の低い方に著しく偏る傾向が見られた（特性尺度：歪度 = 1.507；状態尺度：歪度 = 1.792）。質問紙による離人感経験の定量化を試みた他の研究においても似たような得点の偏りが認められている（Bernstein & Putnam, 1986；Jacobs & Bovasso, 1992）。このことは、日常的に離人感を経験する者が健常者には少なく、そのため得点分布は本来正規分布にならないことを示唆しているのかもしれない。しかし、現実感のわずかな低下といった程度の弱い非現実感は恐らく日常的に頻繁に経験されており、それらに関する項目を質問紙に加えることで正規分布に近い分布が得られる可能性も否定できない。いずれにしろ、離人感の生起率に関して何らかの結論を導くには研究はまだ不足している。

調 査 2

目 的

調査2では特性尺度の構成概念妥当性を検討することを目的とした。特性非現実感とは非現実感経験に関する比較的安定した個人差傾向を指す。離人感とは単独でも経験されるが、さまざまな不適応行動と共に生じることも多い（e.g., Bernstein & Putnam, 1986）。例えば、Fleiss, Gurland, & Goldberg (1975) は精神科の入院患者に、精神障害の種類にかかわらず、比較的

Table 4
特性非現実感尺度得点とUPI得点との相関係数

	男	女
r	.434*** (.394***)	.476*** (.416***)
n	122	87

注) r はピアソン積率相関係数。()内はスピアマン順位相関係数

*** $p < .001$

い離人感の生起率を見出した。これらのことから、非現実感とは個人の不適応の程度と密接に関連すると考えられる。そこで、個人の比較的安定した適応水準を測定すれば、同じく比較的安定した個人差傾向を測る特性尺度の得点と関連があると予測される。

本調査では、被験者の不適応の測度として University Personality Inventory (以後、UPI) を用いた。UPI は、過去1年間の心身の健康状態を尋ねる質問紙であり、個人の日常生活での比較的一貫した適応程度を示すと考えられる。UPI は、臨床的介入の必要のある学生を見つけ出すスクリーニングの手段として有効であると報告されている（松原, 1983）。

方 法

被験者 道都大学社会福祉学部生172名（男子126名、女子46名）と日本大学文理学部生女子51名を被験者として用いた。前者はUPI実施の約1か月前に調査1に参加しており、後者は同じくUPI実施の約1か月前に、調査1で作成した特性尺度と状態尺度に回答していた。UPIの回答に不備のあった14名を除き、209名（男子122名、女子87名；平均年齢18.6歳）を分析に用いた。

質問紙 UPI は心身の状態に関する56項目と4項目の妥当性項目の計60項目からなり、回答は“はい”、“いいえ”の2件法である。各項目について、望ましくない心身の状態を表す回答に1点を与える。妥当性項目を除いた56項目を合計して得点を算出した。可能な得点範囲は0—56であり、得点が高いほど不適応であることを示す。

結果と考察

UPI得点と特性尺度得点との相関係数をTable4に示す。特性尺度は正規分布をなしていないため、順位相関係数も求めた。その結果、男女ともに有意な正の相関係数が得られた。これは、望ましくない心身の健康状態を訴える被験者ほど非現実感を経験する傾向が高いことを示している。この結果は、比較的安定した不適応の程度と特性尺度得点とが関連するとした本調

査の予測と一致している。

ところで、特性尺度と同時に状態尺度も被験者に実施していたが、状態尺度得点とUPI得点との間にも有意な相関係数が得られた（男子： $r=.368$, $df=115$, $p<.001$ ；女子： $r=.279$, $df=84$, $p<.01$ ）。そこで、特性尺度得点を統制した偏相関係数を状態尺度得点とUPI得点との間で求めたところ、有意ではなかった（男子： $r=-.029$, $df=112$, ns ；女子： $r=-.170$, $df=79$, ns ）。一方、状態尺度得点を統制した、特性尺度得点とUPI得点との偏相関係数は有意であった（男子： $r=.273$, $df=112$, $p<.01$ ；女子： $r=.426$, $df=79$, $p<.001$ ）⁵。このことは、UPI尺度得点と特性尺度得点との関連が、状態尺度得点との関連より直接的なものであることを示している。個人内で安定している不適応の程度は、一時的な状態非現実感ではなく、同じく安定した個人差傾向である特性非現実感とより直接的な関係をもつと考えられる。従って、この結果は特性尺度が特性としての非現実感を測定していることを示しており、同尺度の構成概念妥当性を支持すると言える⁶。

調査 3

目的

本調査では状態尺度の構成概念妥当性を検討するため、同尺度得点と感情状態との関係を調べた。

離人感の生起にかかわる状況要因として、自己への脅威あるいはストレッサーの存在を多くの研究が報告している（Bernstein & Putnam, 1986; Noyes & Kletti, 1976; Munich, 1978; Trueman, 1984）。例えば、Noyes & Kletti (1976) は生命の危うい状況下で離人感が頻繁に起こることを見出した。また、Trueman (1984) によると、離人感をもつ被験者の多くが対人関係上の問題、愛情対象の死、同一性上の問題などの脅威事態あるいは心理学的ストレッサーを離人感の生起に先行して経験していた。自己への脅威の認知は不安や抑うつ、敵意といった否定的な感情反応を生じやすくする（Lazarus & Folkman, 1984 本明・春木・織田監訳, 1991）。従って、状態非現実感を経験している被

験者は、何らかの脅威事態に遭遇しており、それ故否定的な感情も経験しやすいと予想される。実際、離人感経験に不安や抑うつが伴うことを報告している研究は少なくない（Munich, 1978; Trueman, 1984）。これらのことから、ある状況下で個人が経験している非現実感の程度を状態尺度が測定しているのならば、同尺度の得点と否定的な感情反応との間に関連があると予測される。

方法

被験者 道都大学社会福祉学部生 85 名と順正短期大学生 134 名、合計 219 名（男子 68 名、女子 151 名）を被験者として用いた。平均年齢は 19.1 歳であった。

質問紙 多面的感情状態尺度（寺崎・岸本・古賀, 1992）を被験者の感情状態の測定に用いた。同尺度は否定的感情を測る 3 尺度（抑うつ・不安、敵意、倦怠）と肯定的感情を測る 3 尺度（活動的快、非活動的快、親和）、中性的感情を測る 2 尺度（集中、驚愕）の合計 8 尺度からなる。

手続き 多面的感情状態尺度と調査 1 で作成した状態尺度とを合わせ冊子にしたものを集団場面で被験者に実施した。被験者はまず状態尺度に回答し、続いて多面的感情状態尺度に回答した。

結果と考察

多面的感情状態尺度の中で否定的感情状態を測定する 3 尺度の得点を合計し、合成得点を求めた（可能な得点範囲：30—120）。同様に、肯定的感情状態を測定する 3 尺度から、また中性的感情状態を測定する 2 尺度からそれぞれ合成得点を求めた（肯定的感情得点の可能な範囲：30—120；中性的感情得点：20—80）。これらの合成得点および状態尺度得点は男女間で差異が認められなかった（否定的感情： $t(195)=.109$, ns ；肯定的感情： $t(199)=-1.387$, ns ；中性的感情： $t(199)=-.999$, ns ；状態非現実感： $t(217)=1.078$, ns ）ので、以降の分析に性別の要因は含めなかった⁷。

状態尺度の得点の高い順から被験者を 3 分の 1 ずつ選び、それぞれ高、中、低非現実感群とした。各群における否定的、肯定的、中性的感情得点の平均を Table 5 に示す。一元配置分散分析の結果、否定的感情について非現実感群の主効果が有意であった（ $F(2, 194)=14.96$, $p<.001$ ）。Ryan 法による多重比較の結果、高非現実感群は他の 2 群に比べ有意に否定

⁵ スピアマンの順位相関係数と偏順位相関係数を用いても同様の結果であった。

⁶ 特性尺度は状態尺度に比べ項目数が多い。そこで、Table 1 に掲載された順序に基づき、奇数番目の項目と偶数番目の項目とに特性尺度を分け、別々の得点を算出した。奇数番目得点と偶数番目得点とはともに、状態尺度より少ない 24 項目の合計得点となった。上述の分析を繰り返したところ、どちらの得点を用いた場合も、上述したものと同じパターンの結果が得られた。このことは、項目数の多さが、特性尺度得点とUPI得点との間により直接的な関連の見られた原因ではないことを示している。

⁷ 否定的感情状態を測定する 3 尺度のいずれかに欠損値のある被験者が 22 名いた。また、肯定的感情状態を測定する 3 尺度のいずれかに欠損値のある被験者が 18 名、中性的感情状態を測定する 2 尺度のいずれかに欠損値のある被験者が 18 名いた。これらの被験者を当該の合成得点を用いる分析から除いた。

Table 5
各状態非現実感群における否定的, 肯定的,
中性的感情得点の平均

	状態非現実感		
	低	中	高
否定的感情 ¹⁾	56.354 ^a	63.412 ^b	71.688 ^c
肯定的感情 ²⁾	69.746 ^a	71.557 ^a	69.578 ^a
中性的感情 ²⁾	35.075 ^a	41.629 ^b	44.641 ^b

注) 同一行中で異なるアルファベットをもつ値同士は有意に異なる

¹⁾ 低状態非現実感群: $n=65$; 中群: $n=68$; 高群: $n=64$.

²⁾ 低状態非現実感群: $n=67$; 中群: $n=70$; 高群: $n=64$.

的感情が高く, 中非現実感群は低非現実感群に比べ有意に高いことが示された⁸.

特定の状況下で被験者が経験する状態非現実感の程度は, その個人の特性非現実感によってある程度規定されると思われる. 本調査に参加した被験者のうち63名は本調査の6か月前に調査1に参加し, 特性尺度に回答していた. また, 108名には本調査の1週間前に特性尺度を実施していた. これら171名について, 特性尺度得点と状態尺度得点との間には有意な相関係数が認められた ($r=.601$, $df=169$, $p<.001$)⁹. 一方, 調査2の結果は特性非現実感が適応性と関連のあることを示していた. 適応性は個人の感情状態に影響を及ぼす要因の一つと考えられる. これらのことから, 状態非現実感の高い被験者は特性非現実感が高く, それ故適応性が低い傾向にあり, 感情状態も否定的になりやすいという可能性が考えられる. このことは, 状態非現実感と否定的感情との間に見られた関連が, 感情状態の変動に伴って状態非現実感に変化することを必ずしも示していないことを意味する. そこで, 被験者の状態非現実感に及ぼす特性非現実感の影響を統制するため, 特性尺度の得点に基づいて被験者を3群に分けたのち, 状態非現実感群と共に要因

として用い, 3×3 の二元配置分散分析を行った. その結果, 状態非現実感群の主効果のみが有意であった ($F(2, 157)=7.76$, $p<.001$)¹⁰. この結果は, 特性非現実感を媒介としない, より直接的な関連が状態非現実感と否定的感情との間にあることを示している.

以上の結果から, 状態非現実感是否定的な感情状態と密接に関連していることが示唆された. この結果は本調査の予測と一致し, 状態尺度の構成概念妥当性を支持するものである.

ところで, 肯定的感情については, 一元配置分散分析の結果, 非現実感群の間で有意に異なることが示された ($F(2, 198)=.33$, ns)¹¹. 一方, 中性的感情は非現実感群間で有意に異なっていた ($F(2, 198)=14.99$, $p<.001$). Ryan法による多重比較の結果, 高非現実感群と中非現実感群はともに低非現実感群に比べ, 有意に中性的感情が高いことが示された. 高非現実感群と中非現実感群の間に有意な差はなかった¹². 本調査で用いた多面的感情状態尺度では, 中性的感情とされる感情状態は集中と驚愕の二つである. 中性的感情が低い状態は, 何かに注意を集中しているのではなく, また何かに驚いてもいないという, 比較的平静

¹⁰ 特性尺度の実施時期が1週間前であった被験者と6か月前であった被験者とに分けた上で, あらためて状態非現実感群と特性非現実感群の分類を行い, 同様の二元配置分散分析を実施した. その結果, どちらの実施時期においても状態非現実感群の主効果のみが有意であった (1週間: $F(2, 95)=3.50$, $p<.05$; 6か月: $F(2, 53)=3.68$, $p<.05$).

¹¹ 合成得点ではなく三つの肯定的感情尺度の得点を用いて同様の分散分析を行ったところ, 活動的快尺度と非活動的快尺度では合成得点を用いた結果と同様に, 非現実感の主効果が有意ではなかった (活動的快: $F(2, 215)=.48$, ns ; 非活動的快: $F(2, 215)=.43$, ns). しかし, 親和尺度では非現実感群の主効果が有意であった ($F(2, 215)=3.50$, $p<.05$). Ryan法による多重比較の結果, 低非現実感群は他の2群に比べ有意に親和的感情が低く, 中群と高群間には有意な差はなかった. なぜ非現実感が低いと親和的感情が低くなるのかについては現在のところ妥当な説明を与えるのは困難である.

¹² 合成得点ではなく二つの中性的感情尺度ごとに同様の分析を行ったところ, 集中尺度と驚愕尺度でもともに非現実感群の主効果が有意であった (集中: $F(2, 214)=9.41$, $p<.001$; 驚愕: $F(2, 215)=17.38$, $p<.001$). Ryan法による多重比較の結果, 高非現実感群と中非現実感群は低非現実感群に比べ, 集中と驚愕の両得点が有意に高く, 高非現実感群は集中得点が中非現実感群よりも有意に高いことが示された. これは, 合成得点を用いた分析とよく似た結果であった. また, 本調査では否定的感情得点と中性的感情得点との間に高い相関が見出された ($r=.694$, $df=193$, $p<.001$). そこで, 否定的感情得点を共変数とした共分散分析を行ったところ, 分散分析の結果と同様に非現実感群に有意な主効果が認められた ($F(2, 191)=4.26$, $p<.05$). これは, 中性的感情の程度と状態非現実感との間に否定的感情を媒介としない, より直接的な関係のあることを示している.

⁸ 合成得点ではなく三つの否定的感情尺度の得点を用いて同様の分散分析を行ったところ, 3尺度とも非現実感群の主効果が有意であった (抑うつ・不安: $F(2, 216)=13.77$, $p<.001$; 敵意: $F(2, 213)=12.80$, $p<.001$; 倦怠: $F(2, 212)=6.34$, $p<.001$). Ryan法による多重比較の結果も, 敵意尺度で中非現実感群と低非現実感群の間に有意な差が認められなかったことと倦怠尺度で中非現実感群と他の2群間に有意な差が認められなかったことを除くと, 合成得点の結果と同様のものではあった.

⁹ 特性尺度の実施時期が1週間前であった被験者のみでは, $r=.726$, $df=106$, $p<.001$ であり, 6か月前の被験者のみでは, $r=.500$, $df=61$, $p<.001$ であった.

な状態であると思われる。本調査の結果は、平静な感情状態で非現実感が低下する傾向を示しているのかもしれない。

最後に、非現実感に関する男女間の差異について本研究の結果は一貫していなかった。調査1で女子に男子よりも高い特性尺度得点と状態尺度得点を得たが、調査3では状態尺度得点において男女間に有意な差が見られなかった。離人感の生起率に関する先行研究では、男女間に差のないことを報告しているものもあれば (Trueman, 1984), 女子により高い生起率を見出したもの (Myers & Grant, 1972) や男子により高い生起率を一部の症状に見出したもの (Jacobs & Bovasso, 1992) もある。特性および状態非現実感における性差について明らかにするためにはより広範な調査が必要であろう。

引用文献

- American Psychiatric Association 1980 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 3rd ed. Washington, D. C.: American Psychiatric Association.
- Bernstein, E. M., & Putnam, F. W. 1986 Development, reliability, and validity of a dissociation scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **174**, 727-735.
- Fleiss, J. L., Gurland, B. J., & Goldberg, K. 1975 Independence of depersonalization-derealization. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 110-111.
- 福井康之 1990 感情の心理学 川島書店
- Jacobs, J. R., & Bovasso, G. B. 1992 Toward the clarification of the construct of depersonalization and its association with affective and cognitive dysfunctions. *Journal of Personality Assessment*, **59**, 352-365.
- 加藤正明・保崎秀夫・笠原 嘉・宮本忠雄・小此木啓吾 1985 増補版精神医学辞典 弘文堂
- ラザラス R. S.・フォルクマン S. 本明 寛・春木豊・織田正美 (監訳) 1991 ストレスの心理学——認知的評価と対処の研究—— 実務教育出版 (Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.)
- Levy, J. S., & Wachtel, P. L. 1978 Depersonalization: An effort at clarification. *American Journal of Psychoanalysis*, **38**, 291-300.
- 松原達哉 1983 大学生の精神健康調査法 (UPI) の利用 心理測定ジャーナル, **19**, 8-10.
- Munich, R. L. 1978 Depersonalization in a female adolescent. *Journal of Psychoanalytic Psychotherapy*, **6**, 187-199.
- Myers, D. H., & Grant, G. 1972 A study of depersonalization in students. *British Journal of Psychiatry*, **121**, 59-65.
- Noyes, R., Jr., & Kletti, R. 1976 Depersonalization in the face of life-threatening danger: An interpretation. *Omega*, **7**, 103-114.
- Roberts, W. W. 1960 Normal and abnormal depersonalization. *Journal of Mental Science*, **101**, 478-493.
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., Lushene, R., Vagg, P. R., & Jacobs, G. A. 1983 *Manual for the state-trait anxiety inventory (Form Y)*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- 田辺 肇 1992 意味喪失感と疎外感 日本心理学会第56回大会発表論文集, 122.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.
- Trueman, D. 1984 Depersonalization in a non-clinical population. *Journal of Psychology*, **116**, 107-112.
- 1994. 8. 31 受稿, 1995. 11. 11 受理——